

# THE NMUN KOBE TIMES



Kobe City University of Foreign Studies

準備の夏を終え、各国代表が再び集う  
次なるステージに向け、本学で 2 回目の模擬国連演習授業



写真：代表たちが議長からモーションの指名を得るためにプラカードを挙げている。

## 1 卷 2 号を担当した記者

加茂隆大	高野七海
船橋ゆずり	大石紗英
塩谷広子	山崎智美
白石汐音	森田帆風
上野稜	東前彩美
阿部弘果	

本号の日本語訳は、本学 ICC の後期科目「翻訳」授業の一環で、北岡直樹、金志勲、鈴木麻美、南野安耶レベッカ、時末光、那須彩乃、西岡和馬、阿部望美が担当した。

夏休みは終わりを迎えてしまったが、本学で 11 月に開催される模擬国連世界大会 (NMUN) に参加する 36 人の学生たちにとっての夏休みは、いつ終わるとも知れない調査や文書作成に勤しむ日々であった。彼らは本番まで 2 カ月弱と迫る大会に向け、山積みの課題に立ち向かうべく再び集った。

7 月に行われた第一回目の NMUN の授業から約 2 ヶ月後の 9 月 24 日、二回目の授業が行われた。全米学生会議連盟 (NCCA) が 8 月 1 日に発表した、国連総会 (GA) と国連安全保障理事会 (SC)、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、国際連合経済社会理事会 (ECOSOC) の四つのバックグラウンド・ガイドを使い、参加者はポジション・ペーパーの執筆に着手した。彼らはこの一カ月に二度、その草稿を提出しており、それらは過去の模擬国連世界大会に参加した本学の学生 22 人によって添削されている。参加者は三回目の授業が行われる 10 月 15 日までに最後の草稿を書き終えることになっている。

(次頁に続く)

授業は、3人の模擬国連経験者による講義で始まった。本学ロシア学科3年生でセルビア代表（GA）の前村大地さんは、方針の立て方について説明した。模擬国連に参加するためには、リサーチ・ペーパー（RP）とポジション・ペーパー（PP）を執筆し、ワーキング・ペーパー（WP）の方針を固めることが求められる。

前村さんは、担当国の基礎情報を含むRPの書き方について、そしてそのRPを代表が担当国の議題に関する方針を示すPPへどのように発展させていくべきかを説明した。初参加の代表は何から始めるべきか分からなくなりがちである。前村さんは四つのステップを踏むことを勧める。問題を見極め、その原因を見つけること、そして目標を決定し、最後にその問題を解決する方針を見つけ出すことである。前村さんは過去の計画について調べることを勧めた。例えば、シリア内戦などの近年の紛争を解決するために、米国とロシア連邦の対立やユーゴスラビア戦争について調べるということである。もし計画が失敗に終わったなら、「なぜその計画が失敗したのかを考えた上で今存在する問題を解決するためのアクションを取るために計画を改善する」ことが必要だと前村さんは言う。

前村さんによると、小さな目標を決定することが、大きな目標を達成するための第一歩であり、代表者はまず小さな目標を達成するための方針を立てた上でそれを大きな目標へと展開していくべきである。「もし、大きな目標を達成することが困難に思われたなら、まずは妥協案である小さな目標を達成するように試みてください」と前村さんは言った。独自の観点を持つこともとても重要で、この観点があれば代表は得策を立てられるという。



前村 大地

本学国際関係学科2年生で、オーストラリア（GA）代表である中村拓巳さんは、ワーキング・ペーパー（WP）の元となる概念の練り方を説明した。次の行動を決めるディスカッションのために用意されるものがWPである。代表者はどんな考えをWPに盛り込むかについて議論と交渉を重ねる。これが議長によって提出されると決議草案（DR）と呼ばれる。PPは代表する国のことについてのみ書かれるのに対し、WPは自国と他国の両国の利益についても書かれる。中村さんは「あなたの要求を提案することも必要だが、時には他国の代表者の意見も受け入れるよう妥協しなければならない」と言い、続けて「あなたの考えを活かすために他国と交渉しなければならない。国を代表しているのだから、他国があなたの意見を受け入れるように迫る必要もあるだろう」とした。

中村さんによれば、説得力のあるWPを作るには三つの段階がある。最初の段階は「推敲」だ。この段階で、政策をより具体的に詳細なものにしていく。自分の考えの論理性を示すのもっとも有効な手段の一つが演繹法であると中村さんは考えている。二つ目の段階は「再確認」である。この段階で、政策が担当機関の指示と一致しているか、自国の立ち位置を明確にしているか、そ



中村 拓巳

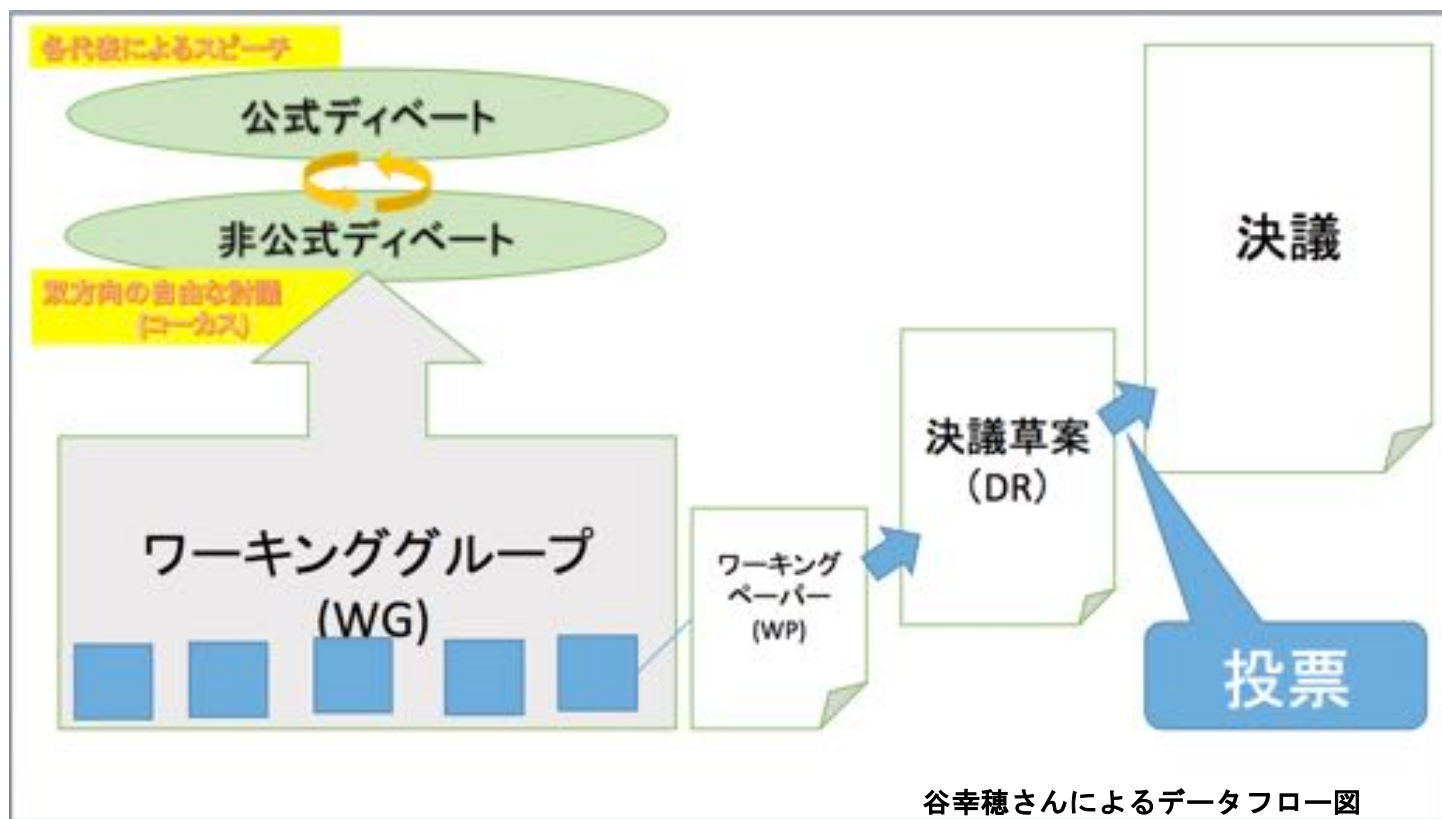
して状況改善に役立つか、ということを確認する。そして最後の段階が「政策を条項にまとめる」で、決議案のようにして書かれる。「代表者は、どのようにしたら考えを条項のようなスタイルで書けるのか知っておかなければならない」と中村さんは言った。「今から会議が終わるその瞬間まで、皆さんは自分のワーキング・ペーパーに取り組み続けることとなるのです。」

本学英米学科 4 年生で、ニュージーランドの安全保障理事会代表である東美優さんは、会議の進み方を説明した。会議では、議題の設定から休会まですべての行程がモーションと呼ばれる代表からの正式な要求によって進められる。また、代表たちがスピーチや投票をする公式ディベートと代表たちが席を立って自由に話し合い、WP を作るために政策の交渉などを行う非公式ディベートが代わる代わる行われる（ただしモーションが申し立てられ大多数で賛成された時だけである）。

この会議の目的は「満場一致で決議案を通すこと」であり、そのために代表者たちは彼らの WP でできるだけたくさんの支持を得なければならない。WP が完成すれば、代表者たちはほかの代表者の署名をできるだけたくさん集め、DR として提出しなければならない。「私たちは WP を数回修正しなければならない、その後ようやく決議草案として認められるのです」と東さんは言う。しかし、自分の言い回しを残してほしいと考えているほかの代表者たちと文書の修正をめぐって折り合いをつけるのは簡単なことではない。



東 美優



谷幸穂さんによるデータフロー図

休憩の後、代表たちはモーション（動議）の出し方を練習した。モーションを出すためには、Dias（議長）がモーションの有無を尋ねた際に代表はプラカードを挙げなければならない。それから Dias はモーションを出す代表を選ぶ。代表は皆、会議に関わりたいと思っているので、これは通常、激しい競争の場面となる。

代表たちは当初、素早くプラカードを挙げる

に躊躇していたが、積極的に素早く行動することに次第に慣れていった。ローリー・ゼネック西出教授によると、実際の模擬国連においては、「モーションを出したい人ばかりなので、積極的にならなければならない。」素早く行動しなければ、「（モーションを出すよう）選ばれないし、議長はあなたに目もくれないでしょう」とゼネック西出教授は説明した。

モーシヨンの練習の後、代表たちは国ごとの非公式ディベートのため、ガーナ、オーストラリア、セルビア、ニュージーランド、ソマリア、そしてウガンダの国別グループに分かれた。彼らは自らが代表する国の立場や状況に基づいて意見交換をした。例えば、ガーナ

(ECOSOC) の代表は、最近起こった洪水によって国の基盤が弱まっているときにこそ、公共衛生設備を改善する必要があると指摘した。セルビアの代表は、EU に加盟したい一方で、EU が加盟国に対して奨励している移民の受け入れが

不可能であるという国のジレンマについて言及した。

代表たちは次に、所属機関別に分かれた。国連総会のグループでは、国際的な地位的階層において、大量破壊兵器 (WMD) の所有国が高い地位を占める傾向があることに加え、多くの加盟国が現在世界で出回っている 875 億もの小型武器 (SALW) の売り上げに関与していることから、議題の達成が難しいと言うことに言明した。

## 神戸大会の模擬国連機関とその二つの議題

### 国連総会 (GA)

- 大量破壊兵器の廃絶
- アジア-太平洋地域での小兵器・軽兵器の不法取引との闘い、その防止、根絶のための計画の実施

### 経済社会理事会 (ECOSOC)

- あらゆる国家、国民、社会の階層にいたる持続可能な発展の実現
- 災害のリスクを下げ、早急に復興可能な世界の設計

### 国連難民高等弁務官 (UNHCR)

- 危険や紛争からの子供たちの保護
- 気象変化が環境に与える影響への取り組みと順応

### 安全保障理事会 (SC)

- 北朝鮮民主主義人民共和国の現状
- 紛争防止と女性・女児のエンパワーメント

UNHCR のグループでは、ニュージーランド代表が海面の上昇により太平洋の国々で生まれた難民を減らすように協力を求めた。またソマリア代表は自国の政府制度の設立の重要性と、十分な食料供給制度の欠乏、少年兵問題について言及した。

議論の最中、代表たちは夏の間各自で調べた情報を交換し合い、ポジション・ペーパーの最終草稿をどのように仕上げているかについても話し合った。膨大な課題に圧倒されている代表もいたが、積極的な議論を通じて、そしてメンターからの激励によって、代表たちはお互いから刺激を得て、モチベーションを高め合った。

本学学生 23 人を含む、大学コンソーシアムひょうご神戸と全国外大連合 (外大連合) の二つの機関に属す計 36 人の代表が 2 回目の授業に出席した。今秋 9 月から本学の日本語教育プログラムで学ぶドイツ北部のデュースブルク・エッセン大学からの留学生 3 人もこの授業に参加した。彼らは来る大会に日本代表として出席する予定である。

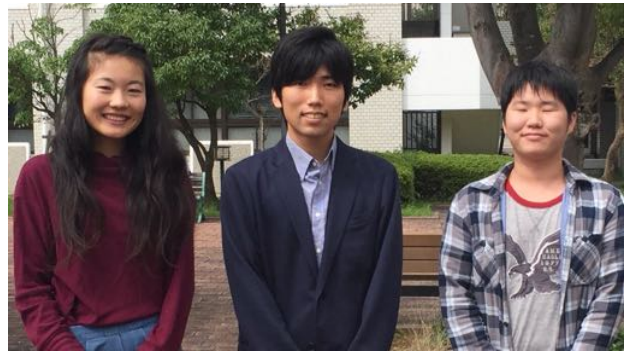
(この記事は加茂隆大、阿部弘果、森田帆風、高野七海、上野稜、大石紗英、白石汐音、山崎智美、船橋ゆずりが担当した。)

## メンターの献身的な支援に感謝

二人の代表、名古屋外国語大学 4 年生である栗本博子さんと京都外国語大学の 1 年生である谷翔野さんはポジション・ペーパーを書くのに最も苦労した。彼らはウガンダ代表としてパートナーである (UNHCR)。しかし、異なる大学に通っているため、ほとんど互いに会うことができなかった。ポジション・ペーパーには政治上の事実や条項を使う必要があり、さらに財政上のデータによって裏付けられなければならないため、その執筆は難しかったと栗本さんは述べた。意見を書いただけであれば、それはポジション・ペーパーではなくなってしまうから、と彼女は指摘した。

行き詰っていた二人の前に救世主が現れた。本学国際関係学科 4 年生でチェコ大会代表の経験を持つ浦町直弘さんである。浦町さんはメンターとして夏の間何度もメールを通して二人を助けた。「二人が会議を最大に楽しむための土台を整えるお手伝いをしたい」と浦町さんは話す。

栗本さんは「知りたいことはあっても欲しい情報が見当たらないことが多い。浦町さんは何を調べるかということだけでなく、どのように調べるかということも教えてくれた」と言う。そして「メンターという身近な存在がいてくれるのはありがたかった」と続けた。(上野稜)



左から、栗本、浦町、谷

## ポジション・ペーパーの内容を現実に

本学英米学科 1 年生の井上稚菜さんは、「気象変化が原因の難民問題には、持続可能な農業が解決へのカギを握っている」と述べる。彼女はガーナ共和国の代表 (UNHCR) として、ガーナにおける気象変動の影響に取り組んでいる。調査の末、彼女は国際連合大学 (東京) で行われている農業プロジェクトに出会い、それがガーナの厳しい気象に適応する可能性を発見した。ガーナ北部は半乾燥状態で、気象変化の影響を受けやすく、干ばつや洪水も珍しくない。これが原因でガーナの農夫たちは食料を確実に供給することができず、他国からの難民を受け入れることも出来ない。むしろガーナ人自身が難民になりうる状態である。その農業プロジェクトはまだ研究段階ではあるが、井上さんは「このプロジェクトが完成したら、半乾燥地域の食糧難を解決し、世界中の難民を減らすことに貢献できる」と確信している。(阿部弘果)

本学英米学科 1 年生の井上稚菜さんは、「気象変化が原因の難民



井上 稚菜

「いきなり良いアイデアが浮かぶ、ということはそうそうありません。まずは国内政策を調べてみるのがよいでしょう。」「できるだけ早く国連式の書類、資料の書き方に慣れてください。」

植田奈菜子 (ECOSOC 副議長。チェコ、ニューヨーク大会経験者)

「質問するのを怖れないで。」「パートナーと情報を共有して議題についての知識を深めてください。」

エミリー・ジョンソン

(UNHCR 副議長ニューヨーク大会経験者)

メンターからのアドバイス

「バックグラウンド・ガイドをよく読むこと。ポジション・ペーパーを書くにあたってとても重要です。」「情報は他の人に頼らず、自分自身で調べ原稿を書き上げましょう。」  
吉松紗絵子 (国連総会副議長。チェコ、ニューヨーク大会経験者)